

71 立体コピーを使ったスポーツ競技理解向上の取り組み

理療教育課 江黒直樹, 細川健一郎

I. 目的 スポーツの場면을視覚的に認知したことがない視覚障害者(全盲者)に対して、スポーツ場面における複雑な身体動作の理解を促すことは難しい。特に陸上の棒高跳びや器械体操の跳馬などにおける空中姿勢の説明は困難だといえる。一方、視覚に障害があっても触覚を効果的に使い2次元的な空間を十分に理解することが可能であることがわかっている。そこで、説明が難しいスポーツにおける身体動作(姿勢)について、立体コピーを使用することで、スポーツ競技の理解を向上させることを目的として標記取り組みを実施した。

II. 調査について

1. 調査対象 理療教育部に在籍している全盲者2名(男性)
2. 調査時期 2015年10月
3. 調査方法 対面による聞き取り調査
4. 調査内容 陸上競技4(棒高跳び2, 幅跳び1, 短距離走1), 器械体操3(跳馬1, 鞍馬1, 段違い平行棒1), 新体操1(リボン), 合計8つのスポーツ中の姿勢を口頭で説明した場合と立体コピーに触れながら口頭で説明を加えた場合の2項目とした。その順は、まずは口頭のみでの説明を行い、その後続けて立体コピーに触れながらの説明を実施した。
5. 評価方法 評価項目は「1. 全く理解できない～5. とても理解できる」を両極とする5段階とし、口頭のみで説明した場合と立体コピーを加えた場合のそれぞれで実施した。

III. 結果と考察

1. 結果: 口頭のみで説明した場合の評価の平均は2.3(A氏1.6, B氏2.9), 立体コピーを加えて説明した場合の評価の平均は4.7(A氏4.4, B氏4.9)であり、口頭のみの場合に比べ2.4P(A氏2.8P, B氏2.0P)上昇した。スポーツ種目別(「陸上」「体操(器械体操, 新体操)」(以下「体操」)の別)に見ると、陸上は口頭のみで説明した場合の評価の平均は3.0(A氏2.3, B氏3.8), 立体コピーを加えて説明した場合の評価の平均は4.9(A氏4.8, B氏5.0)であり、口頭のみの場合に比べ1.9P(A氏2.5P, B氏1.2P)上昇した。一方、体操は口頭のみで説明した場合の評価の平均は1.5(A氏1.0, B氏2.0), 立体コピーを加えて説明した場合の評価の平均は4.4(A氏4.75, B氏4.0)であり、口頭のみの場合に比べ2.9P(A氏3.8P, B氏2.0P)上昇した。結果、陸上より体操の方が、口頭のみと比べ、立体コピーを使用した際の評価平均が1.0P(A氏1.3, B氏0.8P)高いことがわかった。
2. 考察: 種目に関わらず立体コピーを利用した方が評価は上昇しているが、両氏の経験のある陸上の短距離走では、口頭のみでの説明でもある程度の理解を得られた(口頭のみでの説明評価平均4.0)。加えて、口頭説明で適切な比喩表現が可能な場合は、経験したことの無い身体動作でも姿勢のイメージが作りやすいように思われた。換言すれば、実施経験がなく、動作を口頭で説明する際に対象者の運動経験に寄り添った比喩表現のできないものは、立体コピーでの説明が効果的であると推察できた。